

2014年度自己点検・評価報告書(シート)

【目標の進捗状況(達成度)評価・報告】(最終年度)

《大学》

担当(記述)部局は、 ☆印の箇所を記入してください。

I. 評価項目・要素と担当部局

本報告書(シート)の自己点検・評価項目・要素と担当部局は次のとおりである。

対象部局	法学研究科
大項目	6 教育内容・方法・成果 (研究科)
中項目	6.4 成果
小項目	6.4.1 教育目標に沿った成果が上がっているか。
要素	学生の学習成果を測定するための評価指標の開発とその適用 学生の自己評価、卒業後の評価(就職先の評価、卒業生評価)
小項目	6.4.2 学位授与(卒業・修了判定)は適切に行われているか。
要素	学位授与基準、学位授与手続きの適切性 学位審査および修了認定の客観性・厳格性を確保する方策(院)(専門)

II. 目標の進捗状況(達成度)評価と報告【2014.4.30現在】

《進捗状況(達成度)評価》

本項目において、2009年度～2013年度の中期的な「目標」と「指標」を次のとおり設定し、毎年度進捗状況(達成度)の自己評価を行っている。進捗状況(達成度)評価は、目標の2014年4月30日現在における進捗状況(達成度)の評価(2013年度1年間の活動評価ではなく、2014年4月30日現在で目標がどこまで進んだかの評価)であり、A、B、C、Dの4段階で行ったものである。A、B、C、D評価の基準は目安として次のようなものである。

- A : 目標実現のための計画や方策などを適切に実行し、目標を達成している。もしくはほぼ達成している。
- B : 目標実現のための計画や方策などを概ね適切に実行しているが、まだ目標は達成していない。
- C : 目標実現のための計画や方策などを実行しているが十分ではなく、目標は達成していない。達成にはまだしばらく時間がかかる。
- D : 目標実現のための計画や方策などを実行していない。当然目標は達成していない。

2009年度に設定した「目標」	左記目標の「指標」	進捗状況(達成度)評価				
		2009	2010	2011	2012	2013
1. 学習成果を図る適切な評価指標を開発するために、まず学習にとって阻害的効果をもたらす諸要因を発見し、これを除去するための検討を行う。	→「学生・教員に対するアンケート調査の実施と分析」「拡大大学院問題検討委員会(およびその内部に設置するWG)における教育効果についての分析・検討」	C	C	B	B	B
2. 各プログラムに特有の教育上の問題点を発見するための手順を整備する。	→「学生・教員に対するアンケート調査の実施と分析」「プログラム別教員会議の設置と検討の進捗状況」	C	C	C	C	B
3. 後期課程における論文指導の適切さを高めるために手順の改善を図る。	→「正副指導教員からなる指導委員会による論文指導プロセスの検証と指導項目・指導方法の明文化の検討」「博士学位取得モデルの妥当性に関する定期的な検証とその改善」「内規ないし履修モデルの改正」	B	B	B	A	A
4. 学位審査の客観性・厳格性を対外的に確保するために学位審査手順の公開性を高める。	→「公開での口頭試問の実施率」「学外・研究科外の審査委員の招聘率」「学位審査手順の公開性を高めるための検討の進捗状況」「規程ないし内規の改正」	B	B	A	A	A
		☆				
2010年度以降に設定した「目標」	左記目標の「指標」	2009	2010	2011	2012	2013
	→					
	→					

《進捗状況(達成度)報告》 担当(記述)部局は「指標」に基づいた報告をしてください。

上記で自己評価した目標の進捗状況(達成度)について、次のとおり説明・報告する。

目標1	B	<p>Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか 2011年度以降教務課作成のフォームのほか、法学研究科独自のアンケートが行われるようになっており、それを下に、FD協議会で懇談、大学院運営委員会、拡大大学院問題検討委員会で検討分析を行った。</p> <p>Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か 明らかになった問題点については、改善している(6.3参照)。</p> <p>Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か 教員向けアンケートは実施されておらず、アンケート項目の検討も含め今後の課題である。</p> <p>その他</p>	☆
目標2	B	<p>Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか 2012年度より、アンケートもプログラム別のものとし、2014年度からはFD協議会にもプログラム代表院生を加えるようになった。また、前年度開催されていなかったプログラム別教員代表で構成される拡大大学院問題検討委員会を開催した。</p> <p>Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か 選択必修科目内の重複問題等が明らかとなり改善策を講じた。ビジネス法務プログラム担当の教員に話し合ってもらい、ビジネス法務プログラムの充実のために税法を複数プログラム共通科目とし、プログラムを充実させた。しかし、プログラム別教員会議を常設化するまでには至っていない。</p> <p>Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か 大学院運営委員会がプログラム単位で構成されておらず、他方、プログラム単位で構成される拡大大学院問題検討委員会は開かれぬ年度もあるなど、プログラム単位の検討が困難であった。2014年度からは大学院運営委員会をプログラム代表中心に構成されるように選出の工夫を行い、旧大学院問題検討委員会に復することとした。</p> <p>その他 規模の小さい大学院であり、会議構成に工夫が必要で、屋上屋を重ねるような組織作りより、問題別に適宜会合を持つ、個別に指導教員に問題点を伝える等、機動的に改善策を実現する方が効果的な場合がある。</p>	☆
目標3	A	<p>Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか 博士学位取得モデルは、2012年度に、研究計画書の提出、副指導教員の決定による指導委員会の設置も含め明確とされ、学位審査基準、評価項目も詳細に定められ内規化された。</p> <p>Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か 博士学位取得モデル、研究計画に沿って研究指導が行われ、外部的にも明確な審査基準に従って学位審査が行われるようになった。</p> <p>Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か ディプロマポリシー、学位取得モデルの適切性につき、大学院運営委員会・大学院問題検討委員会で毎年検証する。</p> <p>その他</p>	☆
目標4	A	<p>Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか 2012年度に内規を改正し、論文審査の副査1名は本研究科委員会以外の者から選定することとし、口頭試問も公開で行うこととした。</p> <p>Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か 2012年度の博士学位審査以降、改正内規に則って学外委員を加え、口頭試問も公開で行っており、これにより学位審査の公開性が高められた。</p> <p>Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か 形式面では、内規改正によって目標は達成されている。今後は公開された口頭試問への関係教員の参加も含め、実質性をどう担保していくかであろう。</p> <p>その他</p>	☆
備考			☆